

平成 29 年 6 月 1 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25284036

研究課題名(和文)聴覚文化・視覚文化の歴史からみた「1968年」：日本戦後史再考

研究課題名(英文)"1968" from the Viewpoint of Visual/Auditory Culture: Reconsidering post-war History in Japan

研究代表者

渡辺 裕 (WATANABE, Hiroshi)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：80167163

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円

研究成果の概要(和文)：学生運動が盛り上がりをもせた「1968年」は、日本戦後史における社会の転換期とされるが、この時期は同時に、芸術や文化の諸領域においても大きな変化が生じた時期でもある。この研究では、視覚文化、聴覚文化、大衆文化、メディア研究の専門家が協同して同時代の言説研究を行い、その変化を検証した。その結果、それらが政治や社会の変化を反映しているというこれまでの理解とは異なり、この時期は人々の感性や心性が大きく変化し、文化の枠組みや価値観全体が構造的な転換を蒙った時期であり、政治や社会の変化もまたその大きな動きの一環をなすものであることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：“1968” is widely acknowledged as a turning point of postwar history in the Japanese society. At the same time, however, remarkable changes have occurred in various realms of arts and culture. We have investigated these changes through the collaboration of experts in visual culture, auditory culture, popular culture and media studies, employing the method of discourse analysis. As a result, we have clarified that the way of sensory perception or mentality changed fundamentally in this period, and caused the structural change of cultural framework and senses of value. We might regard the trend of Japanese society in this period was also the result of this fundamental change, contrary to the conventional explanation that the new trend of arts and culture in this period reflects the change of society.

研究分野：聴覚文化論・音楽社会史

キーワード：メディア論 日本戦後史 聴覚文化 視覚文化 大衆文化

1. 研究開始当初の背景

いま、日本戦後史の見直しが急速に進んでいる。ともすると一括りに捉えられがちであった「戦後文化」の孕む多様性やそこにはたらいっている様々な力学のありようを解明してゆくことは、日本文化の現在や今後を考えてゆく上でも重要なことであり、当然の展開と言える。

そのような中、戦後日本文化の歴史の中で大きな転換点として「1968年」という画期的存在がクローズアップされてきた。とりわけ歴史学においては、学生運動や様々な市民運動などの反体制運動が大きく盛り上がり、また変質をはじめたこの時期の動きは、欧米諸国のそれと軌を一にするものでもあり、世界の地勢図の全体的なあり方の変容にも関わる動きとして、とりわけ政治的、社会的なコンテクストでのその意味が論じられるようになってきている。

その一方でこの時期は、芸術や文化の諸領域においても大きな動きの起こった時期でもあり、それまでの枠組みが崩れたり変容したりする動きが様々な形で生じているが、そのような動きについての研究は必ずしも十分とはいえなかった。たしかに、こうした動きを一種の対抗文化(サブカルチャー)ととらえ、フォークソングや小劇場の台頭などの現象を反体制運動との関連で位置づけたり、デザインや広告などの領域が前面化してきた状況を、消費社会化の問題として説明したりといった個別的な研究はこれまでも行われてきた。しかしながら、このような文化の動きは、単に政治や社会の動きとの関連で説明するというやり方では十分に論じられない。こうした動きの背後には、文化全体の枠組みやシステム、それに相関する人々の心性や感性、価値観そのものに生じている、そのあり方の根本的な変化があるのであり、むしろ逆に、政治や社会の変化の方もそのような大きな動きの一部として捉えるような視点が必要である。本研究はそのような見通しのもとに出発した。

2. 研究の目的

本研究が目指そうとしたのは、近年、美学や芸術研究の領域での大きな動きになっている「感性文化」という観点をふまえてこの時代を見直すことによって、新たな視界をひらくことであった。近代的な学である美学、芸術学はこれまで、美術館やコンサートホールでの「芸術作品」の純粋鑑賞をモデルとしたような形で文化を論じ、歴史を描いてきた。近年になって、従来の美術史や音楽学にかわるものとして、「視覚文化 (visual culture)」、「聴覚文化 (auditory culture)」などの研究領域が確立され、芸術という枠組みや固定観念にとらわれることなく、人々をとりまく日常環境や生活世界の中で体験を広く感性という観点から捉え返してゆくような動きが生じてきている。このような視点を獲得

することで、カント以来の美の「無関心性」や芸術の「自律性」という前提のなかで、ともすると背景に追いやられてきた、芸術が現実社会の中でアクチュアルに行使する力や、人々の生活環境の認識の中で感性の果たしている役割といった問題に焦点があたるようになり、政治や社会に関わる問題系との接点を見出すことができるようになってきた。そのことはまた従来、政治史やそれに関わる文書資料の研究を中心に展開してきた歴史学研究に「心性史」、「記憶」といった観点の導入され、その視界を広げてきている状況とも呼応しつつ、文化のありようやそれが辿ってきた歴史を全体的に捉え返すことを促していると言っても良い。

このように、従来行われてきた、狭義の「芸術」研究の中では視野にはいっていなかった様々な感性的な事象を広く視野におさめ、社会や環境全体に関わる様々な動きのなかでの感性の役割や位置づけにまで立ち入って描き出してゆくという立場を基礎としつつ、いわばその「応用問題」として、文化の枠組みやそこにおける人々の心性や感性のあり方自体が大きく変化したように思われるこの「1968年」前後の時代を対象に設定し、その捉え返しを試みるというのがこの研究の目的であった。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、本研究では、視覚文化研究(佐藤)、大衆音楽研究(輪島)、テレビ文化・CM研究(高野)という、それぞれ異なった領域の専門家を研究分担者に加え、もともと音楽を中心とする聴覚文化研究から出発しつつ、最近ではラジオやレコードなどの諸メディアの展開や、鉄道の音などの環境音によって形作られる音の文化に焦点をあわせた研究を行っている渡辺が研究代表者としてそれらを統括する体制を作ることとした。これらの諸領域は、従来あまり横の連絡がないまま、それぞれがあたかも自律的な領域であるかのような形で研究を進めてきた経緯があるが、同じ問題意識をふまえてこのような共同研究の形をとることで、一見個別的な事柄にみえていたことの背後に、領域をこえて共通する心性や感性のあり方が透けてみえてくる一方で、それぞれの領域ごとの文化的背景や、様々なメディアの関わり方の違いなどによって、その同じ事柄が異なった現れ方をしてくる状況などもみることができるようになる。

具体的な研究方法としては、可能な限りの同時代資料(文字資料のみならず、図像資料や音源も幅広く含む)を集め、言説研究に徹するやり方をとることになった。心性や感性のあり方を対象とするということになれば、資料研究には限界があり、当初はフィールド調査や聞き取り調査のような方法を積極的に採用することも視野に入れていたが、研究を進めるにつれ、生の証言や証拠物件が、それ

自体では必ずしも有効な資料たりえない場合が実際にはかなり多く、むしろ同時代の文化的コンテキストの中で、様々なメディアが絡み合うことで独特の意味を生じさせている状況に着目することが重要であることを認識するにいたった。生の対象のみならず、その対象に向ける人々のまなざしやそれを記録するメディアのあり方もまた相互に絡み合いながらその関係性自体が変化してゆく状況をつぶさに明らかにしてゆくためには、むしろ同時代資料にこだわり、その背景となる文化的コンテキストやメディア状況を徹底的に明らかにしてゆくことに集中すべきであることを認識するにいたった。

さらに、今回の目的は1968年周辺の時期についての解明であるが、背景となる文化的コンテキストやメディア状況を徹底的に読み解いてゆくためには、そこにいたる「前史」的な部分、とりわけメディア史的な背景にまで遡って調査し、議論することが必要となった。調査の過程で明らかになってきたのは、「戦後文化」と言うときにしばしば前提しがちな、第二次大戦の敗戦を契機に文化が180度転換したというような表象は全く誤っており、戦後と言っても1960年代前半くらいまでの時期は文化的には相当部分戦前の継続といっても良い部分が残っていたということである。「1968年」についてもまた、そのような戦前からの文化的コンテキストをしっかりとおさえることによって、その転換期としての意味がはじめて明らかになるのである。とりわけメディア史に関しては従来、あたかも新しいテクノロジーやメディアの登場が文化のあり方や人々の心性を180度変えてしまったかのような描き方をしてきたきらいがあったが、今回の研究では、新たなメディアが登場しても古いメディアに培われた感性がいかに残存し続けたかといった観点から資料を見直すことを心がけた。

4. 研究成果

最初に研究代表者、続いて各研究分担者の研究成果について個別に記述した上で、それらを突き合わせる中から明らかになってきたポイントについて論じる。

研究代表者である渡辺の主要な研究成果は、著書『感性文化論：終わりとはじまりの戦後昭和史』（春秋社、2017）にまとめたので、以下、その大要を述べる。第一の成果として挙げられるのは、第二次大戦後、1960年代前半くらいまでの時期のメディア状況に着目し、それが戦前の延長線上と言ってもよい文化状況にあったこと、そして1968年前後を境にその状況が大きく変化し、そのことが人々の感性の基本的なあり方の変化と結びついていることを明らかにしえたことである。そのために渡辺は1964年に開催されたオリンピック東京大会に着目した。この64年の東京オリンピックはしばしば、戦後復興をなすとげた日本が新たなスタートを切

る契機となったものとして位置づけられるが、この研究では、オリンピック大会にまつわるテレビやラジオの中継放送や記録映画の状況というメディア状況に関わる考察を軸として、そのあり方が実は、1968年あたりを境に確立されてくるその後のテレビや記録映画のあり方とは基本的に異なっており、むしろ戦前のラジオ放送や「文化映画」によって形作られてきた文化の枠組みやそこでの感性のあり方をそのまま引き継いでいるものであること、そこでの人々のオリンピックというものの表象のしかたもまた、その後の時代のものとは根本的に異なるものであったことを明らかにしえた。

第二の成果としては、こうした感性のあり方に関して1968年以後に起こった変化が、レコードなどのメディアや音楽産業のあり方の変化と相関的に起こっている一方で、雑誌などの報道メディアのあり方の変化なども絡まり合った形で出現しており、その結果としてこの時代の反体制運動に代表される政治的な動きとも密接な連関をもっていることを明らかにしえたことが挙げられる。そのために取り上げたのは、1969年に新宿西口地下広場を舞台に起こったフォークゲリラと呼ばれる人々の政治運動であるが、彼らの活動を特徴付けていたのが、政治の「感性化」や音楽の「環境化」といった、それまでの時代の政治運動にはなかったような方向性であったこと、そのような方向性は、レコード業界の再編成の中でこの時期に台頭したインディーズ系と呼ばれるレコード・レーベルで出されたフォークソングなどのレコードに関わる新時代の制作理念とほとんど重なり合っていることなどが明らかとなり、それらを通して、この時期の政治状況の変化と人々の感性のあり方の変化とが密接に連関している状況を描き出すことに成功した。

さらにもう一点付け加えておくと、渡辺は日本橋の上に建設された首都高速道路の景観をめぐる考察も行っている。この研究自体は本研究の開始以前に行ったもので、本研究の枠内のものではないが、本研究をふまえてあらためて見直してみることにより、そこで明らかにした、かつて未来都市的なものとしてポジティブに評価されていた日本橋の首都高の景観が、一転して東京の本来の景観を破壊するものとしてネガティブに捉えられるようになるという人々の感性の変化の過程も、本論で論じている「1968年」前後の大きな変化と完全に連動していることが明らかになった。こうした動きはまた、1970年からはじまる旧国鉄の「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンなどにみられるような、地方に残る文化に古き良き日本の残滓を見出し、それを日本文化の真正なあり方として位置づけようとするノスタルジックな感性のありようとも深層においてつながっており、この時代の感性の変容の重要な一面を照らし出していると言える。

研究分担者の佐藤は、この旧国鉄「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンを軸に据え、その後のJR東日本で展開された「そうだ京都、行こう。」キャンペーンと比較しつつ、主にその図像的特質を中心に検討を加える試みを行った。図像の中に旅行者自身がほとんど登場しない「そうだ 京都、行こう。」とは異なり、都会的・異国的な容貌をもった「他者」である旅行者自身が「真正な日本」を発見するという構図がこの「ディスカバー・ジャパン」の特徴をなしていることを佐藤は指摘している。佐藤はまた、1920年代に於ける権田保之助の民衆文化をめぐる言説を、とりわけその浪花節評価に着目して分析するなど、このような京都表象につながる歴史的な系譜を解明する研究も行った。それらに見出される、オーセンティシティ、キッチュ、ノスタルジーといったキーワードは、他のメンバーの問題系ともいたるところで交叉している。

一方、研究分担者の輪島は、「1968年」への移行期にあたる1950年代半ばから60年代半ばにかけての時期を中心に、大衆音楽をめぐる多様な文化的事象を取り上げた研究を行ったが、とりわけ大阪の大衆音楽シーンで登場した「ドドンパ」というダンス・リズムの分析において、それを支えている、大阪的な土着性と近代的なメディア環境や娯楽産業のあり方が不可分に混じり合ったあり方を明確に示した。輪島はさらにこの成果を、以前から研究を進めていた同時代の「日本調」・「民謡調」流行歌のあり方の問題などとも重ね合わせることで、それらが全体としてもっている、「68年」以降の「ディスカバー・ジャパン」的な方向性とはきわめて対照的なあり方を析出してくることに成功した。他方で、この大阪の「ドドンパ」ブームに深く関わった永六輔が、その直後から『遠くへ行きたい』など、「ディスカバー・ジャパン」的な動きを主導する役割を果たすことになってくるように、この両者の間の移行はかなり複雑な様相を呈している。輪島はそこでキーになる「地域性」・「真正性」といった概念を掘り下げることで、この点に関する考察を深めた。

もう一人の分担者である高野は、もともとの専門であるCM研究に加えて、いわゆる「昭和ノスタルジー」の成立過程の研究を進めたが、その過程において、その起源が1970年代中頃の若者文化にあることを突き止めることに成功した。高野によれば、この1974-5年頃の時期は、戦後世代が先行する世代との差別化を様々な形ではかろうとした時代である。近年の昭和ノスタルジーを代表する映画とされる《ALWAYS 三丁目の夕日》の原作マンガ『三丁目の夕日』の連載がはじまったのもこの時期であり、そこには「ディスカバー・ジャパン」的な大人のノスタルジーに対するカウンターとして位置づけられるような独特なノスタルジーのあり方がみられる。

「ディスカバー・ジャパン」に示されるような、1968年的なノスタルジックな感性は、もちろんその後の時代に向けた文化の転換を示す一つの典型的なあり方であるが、「ノスタルジー」は決して一枚岩であるわけではない。「1968年」的な文化も、必ずしも現代へと直接つながっているわけではなく、むしろそれが様々な変化してゆく様々な局面をトレースするような議論が求められているのである。

4人のメンバー個々の成果を並べてみると、いくつかの共通する論点やキーワードが縦横に交叉し、相互に補完する関係になっていることがわかる。この時代の感性のあり方の変化を端的に示すものとして全員が共通に触れているのが、旧国鉄の「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンである。輪島と渡辺は、そのあり方を、1950年代から60年代中頃まで主流をなしていた、戦前からの遺産を引き継いだ心性、感性との比較において論じているのに対し、佐藤と高野は、それがその後の時代にどのように引き継がれ、また変容していったのかという観点から論じているが、その共通項となるキーワードとしては、「ノスタルジー」・「真正性」・「環境化」・「イメージ化」といったものが抽出される。前二者から浮かび上がってくるのは、高度経済成長や都市化の進行の中で消えてゆく、あるいは消えてしまった過去のものへの愛惜の感情と、それこそを日本の「真正」な文化として位置付けようとする価値観、世界観とが結びついている状況であるが、それに対して、残りの二つ、「環境化」・「イメージ化」は、そこで指定されている「真正」な文化が、現実の何かであるというよりは、メディアによって作り出された漠然としたイメージであり、それが現実社会に対する否定的な感情と絡まり合った形でアクチュアリティをもつにいたったものであることを推測させる。輪島はこのようなあり方を、60年代のフォーク・リバイバルなど、同時期に世界的に展開したフォーク/ロック文化の動きに関してしばしば論じられる「真正性信仰 (cult of authenticity)」が日本において発現したひとつのあり方として捉えるような見方を示唆しているが、今後同時代の現象をさらに丁寧に見直してゆくことでそれが裏付けられるならば、本研究において「感性化」という括りのもとに論じてきた多様なあり方を構造的に捉え直してゆく上での有効な視座となりうるように思われる。

ただ本研究プロジェクトの枠内では、時間的制約もあり、そのあたりを十分に詰めることができなかった。実際に研究をはじめてみると、その研究の射程には当初に想定していたよりはるかに広範な広がりがあることが明らかになってきたが、他方、個々の事例に関しても、その背景にある文化的コンテクストを掘り下げてゆくと思ってもよらない大きなテーマが現れてくるようなことが多く、当初

に想定したよりもはるかに少ない事例しか取り上げることができなかった。そのため、ミッシング・リンクの多い現段階では安易な当て推量でこれ以上一般化するような議論をすることは避けるべきであろう。

現段階では渡辺は他にこの 1968 年前後の感性の変容を示す事象として、若者たちの中で起こったラジオの深夜放送のブームを取り上げ、そこでの反体制的な心性のあり方の変容をラジオというメディアの変容との関連で論じる試みをすでに行っている。著書『感性文化論』に盛り込むことはできなかったが、近日中には何らかの形で論考として公表できる見通しである。他にもいくつかの事例分析の準備を進めており、本研究をベースにして、さらにミッシング・リンクを埋めてゆく試みを今後も続けてゆきたい。また、他の研究分担者も、今後引き続き本研究の延長線上に進められた研究を世に出す用意ができあがっている。例えば高野は、執筆していた著書『ノスタルジー解体：昭和イメージの形成史』（仮題）を本研究期間中に完成させることはできなかったが、ほぼ九分通りできあがっており、順調に行けば本年中には刊行されることになるであろう。

本研究で取り組んだ課題は、文化のあり方やそれを支える感性、価値観の全体的な変容に関わる、きわめて大きな問題系である。今後その周囲に様々な個別研究を積み重ねてゆくことで、さらに大きな広がりが作られてゆくことになるであろう。本研究はそのための基礎がためとして十分な意義を有していると確信している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 27 件)

渡辺 裕、映画《東京オリンピック》は何を「記録」したか：「テレビ的感性」前夜の記録映画、『美学芸術学研究』、査読有、Vol.33/34、2016、pp.127-179

佐藤 守弘、キッチンとモダニティ：権田保之助と民衆娯楽としての浪花節、『大正イマジユリイ』、査読有、Vol.11、2016、pp.9-21

輪島 裕介、大阪の永六輔、『ユリイカ』、査読無、第 48 巻第 14 号、2016、pp.56-63

輪島 裕介、美空ひばり：生きられた神話、『ひとびとの精神史：終焉する昭和 1980 年代』(岩波書店) 査読無、Vol.7、2016、pp.281-306

輪島 裕介、音楽史の可能性、『講座現代：歴史のゆらぎと再編』(岩波書店) 査読無、Vol.5、2015、pp.269-292

高野 光平、サブカルチャーと昭和の記憶、『歴史と向きあう社会学：資料・表象・経験』(ミネルヴァ書房) 査読無、2015、pp.175-194

佐藤 守弘、郷愁と発見：日本近代の不気味な他者、『日本学報』、査読無、Vol.34、

2015、pp.13-28

SATOW Morihito、Railfan and Photographic Collection: A Way to Possess the World、*International Yearbook of Aesthetics*、査読無、Vol.18、2015、pp.424-432

WAJIMA Yusuke、The Birth of Enka、*Made in Japan: Studies in Popular Music in Japan* (Routledge Global Popular Music Series)、査読無、2014、pp.71-83

WATANABE Hiroshi、Takarazuka and Japanese Modernity、*Music and Modernity and Locality in Prewar Japan, Osaka and Beyond* (SOAS Musicology Series)、査読無、2013、pp.193-209

〔学会発表〕(計 20 件)

WATANABE Hiroshi、Music Copyright as a Cultural Fiction: Reconsidering "Contrafacta" of Western Melodies in Pre-war Japan、The 20th Congress of the International Musicological Society、2017 年 3 月 19~23 日、東京芸術大学(東京都台東区)

WAJIMA Yusuke、The Fake Sport by the Fake Japanese?: (Trans)nationalism and Americanization in Professional Wrestling in Japan and Korea、Annual Conference of AAS (Association for Asian Studies)、2017 年 3 月 16~19 日、トロント・シェラトン・センター(トロント市、カナダ)

佐藤 守弘、観光ポスターとトポグラフィ：人を動かす技術、シンポジウム「観光ポスターに見る日本の近代ツーリズムについて」(展覧会「なにで行く どこへ行く 旅っていいね」関連企画、招待講演)、2016 年 11 月 19 日、京都工芸繊維大学(京都府京都市)

SATOW Morihito、Popular Culture in the Modern History of Japan: Popular Entertainment and Kitsch、The 20th International Congress for Aesthetics、2016 年 7 月 24~29 日、ソウル国立大学校(ソウル市、大韓民国)

高野 光平、CM 資料の発掘とその成果(基調講演)、シンポジウム「CM 研究の展開と発展」、2016 年 2 月 9 日、国際日本文化研究センター(京都府京都市)

高野 光平、石田佐恵子、About Databases of early TV Commercials: Examining Representations in Animated Commercials、京都国際マンガミュージアム/京都精華大学国際マンガ研究センター第 7 回国際会議「コミコロジー：理論と実践を絡み合わせる新研究」、2015 年 9 月 26 日、京都国際マンガミュージアム(京都府京都市)

佐藤 守弘、キッチンとモダニティ：浪花節のメディア/空間、大正イマジユリ

イ学会第35回研究会、2015年7月18日、
静岡文化芸術大学（静岡県浜松市）
WAJIMA Yusuke、In Search of the
Japanese Idol: From Nationwide
Attraction to the Local/Transnational
Subculture、18th Biennial IASPM
(International Association for the
Study of Popular Music) Conference、
2015年6月29日～7月3日、カンピー
ナス州立大学（カンピーナス市、ブラジ
ル）

WAJIMA Yusuke、Dodonpa, a Latin Rhythm
Made in Japan?: Transatlantic and
Transpacific Connections in Popular
Music、Music Research Series Paper
Presentation: “Nationalism,
Folklorism and Exoticism in Modern
Japan”、2015年2月17日、ロンドン大
学ゴールドスミス校（ロンドン市、連合
王国）

WAJIMA Yusuke、Japanese Popular Music
after 1970s、国際交流基金 KAKEHASHI
PROJECT(招待講演)、2014年6月13日、
国際交流基金（東京都新宿区）

WAJIMA Yusuke、Min'yo in the Showa
30's Period (1955-1964) in Japan: The
Left-Wing, Bars and Music Industry、
International Symposium
“Safeguarding the Intangible:
Cross-Cultural Perspectives on Music
and Heritage”、2014年2月20日、ロ
ンドン大学ゴールドスミス校（ロンドン
市、連合王国）

SATOW Morihiko、Railfans and
Photography: A Way to possess the
World、19th Jubilee International
Congress of Aesthetics、2013年7月
24日、ヤギェヴォ大学（クラクフ市、ポ
ーランド）

〔図書〕(計3件)

渡辺 裕、春秋社、感性文化論：終わ
りと はじまり の戦後昭和史、2017、352

輪島 裕介、NHK 出版、踊る昭和歌謡：
リズムからみる大衆音楽、2015、272

渡辺 裕、春秋社、サウンドとメディア
の文化資源学：境界線上の音楽、2013、568

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡辺 裕 (WATANABE, Hiroshi)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：80167163

(2) 研究分担者

佐藤 守弘 (SATOW, Morihiko)

京都精華大学・デザイン学部・教授

研究者番号：10388176

輪島 裕介 (WAJIMA, Yusuke)

研究者番号：50609500

大阪大学・大学院文学研究科・准教授

高野 光平 (KONO, Kohei)

茨城大学・人文学部・教授

研究者番号：70401156